いけのや文庫本『島わたり』の本文検討

齊藤探花・河合　恵・古山利恵・田端美冴・鈴木　彰

はじめに

いけのや文庫蔵『島わたり』（外題「嶋わたり　上（中・下）」。内題なし。三巻三軸）は、横浜市内の旧家に伝わる絵巻である。それが世に知られるようになった経緯やそれ以後の動向、書誌情報や基礎的な性格等は齋藤真麻理氏によって整理されており、[1]現在では翻刻本文[2]やデジタル画像[3]を閲覧することもできる。本絵巻を含めた新たな伝本の出現・紹介によって、[4]お伽草子『御曹子島渡り』の研究視野は少しずつ広がりつつあるといえよう。

松本隆信氏「室町時代物語類現存本簡明目録」（『御伽草子の世界』三省堂、一九八二年）以来、『御曹子島渡り』の伝本は、三系統にわけて把握されてきた。そのうち、第一系統は、古梓堂文庫本（絵巻。二軸）、九曜文庫本（絵巻。一軸。下巻のみ存）、九州大学附属図書館支子文庫本（絵巻。二軸）、御伽文庫本など、最も伝本の数が多い。第二系統には秋田県立図書館本（絵巻。一軸）、第三系統には赤木文庫旧蔵本（絵巻。一軸）がそれぞれ知られ、これらの他に、石川透氏所蔵の横型奈良絵本の断簡三点（A～C本）の存在が紹介されている。

本稿で取りあげるいけのや文庫蔵の絵巻（以下、いけのや文庫本）は、石川透氏によって九曜文庫本と近い伝本であるとされている。[5]この指摘は、齋藤真麻理氏が石川論文を踏まえるかたちでその論述を進めているように（後述）、以後の本絵巻に関する基本的な理解となっている。しかし、その本文について細部まで点検してみると、第一系統に属することは確かであるが、単に「九曜文庫本と近い」という評価では把握しきれない問題が存在することが明らかとなる。そこで、本稿では、第一系統の古梓堂文庫本（以下、古梓堂本と略称）・九州大学附属図書館支子文庫本（九大本と略称）・九曜文庫本（下巻のみ）・御伽文庫本（渋川版）との本文比較を通して、いけのや文庫本の本文系統について検討していくこととする。

一　渋川版との距離

いけのや文庫本は渋川版との異同が多くみられる。以下、その特徴的な箇所について巻ごとに具体的にみていこう。

まず、上巻では、はだか島で島人と歌を詠みかわす場面に大きな違いがみられる。

（いけのや文庫本）

御さうしきこしめしかくなん風ふけはさむくはなきかはたか島
あさの衣を身にもまとはすとなかめ給へは島人返歌風ふけはさ
むくはあれとはたか島あさの衣のやうをしらねはと申しけれは

渋川版には傍線部が存在しない。そのため、島人が唐突に御曹子に向かって歌を詠みかけたかのように描かれている。

右の場面に続いて、御曹子が島人に麻の衣を与える場面がある。その場面ではいけのや文庫本でも渋川版でも、島人が喜んだとする描写が具体的になされている。ただし、いけのや文庫本では、それに先立って御曹子が麻の衣を与えるという意思を示した段階で、いったん早くも島人の喜びが描かれている。

（いけのや文庫本）

御さうしきこしめしかくてはかなふましあさの衣をまいらすへ
しき給へとありしかはしま人うけたまはりなのめならすよろこ
ふことかきりなしさて御さうしはみなみにむかひ

（渋川版）

よしつねきこしめしやさしき事を申すものかなさらば麻のころ
もをまいらすべしとてみなみにむかはせ給ひ

傍線部のような描写があることにより、結果的にいけのや文庫本では引用場面と、御曹子が実際に衣を与えた場面の二ヶ所で島人の喜びがくり返し描写されることとなっている。一方、渋川版では島人の喜びが描写されるのは後者のみとなっている。

また、御曹子が蝦夷が島で鬼共にとりこめられる場面がある。いけのや文庫本では次のように鬼共の形相が変化するが、渋川版ではそのような描写はみられない。

（いけのや文庫本）

かれらかせいにはかに七八丈にたかくなり三めん六ひのかたち
をげんし十二のつのをふりたてすてにくはんとしけれは

いけのや文庫本では、鬼共は形相を変化させて御曹子を餌食にしようとするが、渋川版では傍線部がないので、鬼共の形相は変化せずに御曹子がとりこめられるのみとなっている。

次に中巻は、上巻以上にいけのや文庫本と渋川版の違いが顕著な場面が多く、またその違いも大きい。

まず、蝦夷が島で鬼共が「きけんしやうのみやこ」までの道のりを説明する場面を見てみよう。

（いけのや文庫本）

おにともうけたまはりされはてんちくへ行には大河あまたあり一つにははつたい河二にはさくら川三にはきくすい川四にはやうき川五にはごんが川とてひろさも一万ゆしゆんふかさも一まんゆじゆんにてこれへおちあひあつまる水のそこより大風ふきしら浪たちて水のはやき事はみつばのそやをいるかことし水のつめたきことは日本あしはらこくのかんこほりを百あはせたるよりもなをつめたしこれよりみやこへはじゅんふうよくしては七十五日あしけれはいかゝともはからひかたしおなしくはたゝよのつねの舟路ならすしんらうし給はんよりすめはいつくもみやこなりこれにとゝまり給ひて竹をならしてきかせよ

（渋川版）

これよりみやこへはじゅんふうよくして七十余日たゞよのつねのふなぢならずおなじくは是にとゝまり給ふべしすめばいつくも都也たけをならしてきかせ給へ

傍線部にみえるように、いけのや文庫本は天竺への経路にある川の名前や、それを越える難しさを詳細に記しているが、渋川版にはその記述はみられない。

次に、「きけんしやうのみやこ」で御曹子が大王に笛をきかせて兵法を教えてもらう場面も見てみよう。大王が御曹子の笛を評価し、望みを聞くと、御曹子は次のように申し上げる。

（いけのや文庫本）

おそれかましきことなれともこの内裏に大日の兵法御さ候よしうけたまはりてあるあひた御なさけの御でしにせさせ御つたへありてたひ給へかし

（渋川版）

おそれがましき事なれども此だいりに大日のひやうほうのましますよし承りをよび是までまいりてさふらふ也御なさけに御つたへ有て給はり候へかし

いけのや文庫本では御曹子が弟子にしてくれるよう大王に求めているが、渋川版にはその記述がない。

御曹子の望みを聞いた大王は、次のように答える。

（いけのや文庫本）

あらやさしやくはんきよさやうのこゝろさしにてなんなくこれまてきたるそやしていしう〳〵父子ふしふは三世のきえんとう

けたまはるでしにならんとてきたることけふのゑしきにしたけれともしていのけいやくとなのるうへ

（渋川版）

あらやさしのくわんきよが心ざしやなんなく是まで来りしていのけいやくとなのるぞや

いけのや文庫本には、御曹子が大王の弟子になれるかどうかという一連の文脈が生み出されていることがわかるが、渋川版では傍線部の表現がないため、「していのけいやく」という言葉がここで唐突に現れることとなっている。

大王はこの後、御曹子に四十二巻の巻物を実践するように命じ、御曹子はそれを見事行ってみせる。

（いけのや文庫本）

とらのまき物よりひもとき四十二巻し給へるまきものをこと〳〵くをこなひ給へは大わうきこしめしてだうりに御身これまてなんなふきたりたりこのうへはさらはゆるし申さんとりんしゆのほうにかすみのほうこたかのほうきりのほうを御つたへありこれよりのちはむようなりとてざしきをたゝせ給ひけり

（渋川版）

四十二くはんのまき物をこと〳〵くをこなひ給ふ大わう御らんじてまことになんぢは心ざしふかきものなり神妙なりとおほせ有てさらばゆるし申さんとてしていのけいやくをなし給ふ先りんしうの法かすみのほうこたかのほうきりのほう雲井にとび去とりのほうなどを御つたへ有是よりおくはむ益なりとて御ざしきをたたせ給ひにけり

御曹子が四十二巻の巻物の内容を実践したことに大王は感心し、御曹子に様々な巻物を伝える。渋川版では「していのけいやくをなし給ふ」とあり、御曹子が大王の弟子になったということが明確に記述されている。さらに渋川版では、大王がりんしうの法、霞の法、小鷹の法、霧の法に加えて、雲井に飛び去る鳥の法を伝えている。

先に述べたように、いけのや文庫本では御曹子が大王の弟子になれるかどうかという文脈がすでに生み出されていた。この場面には渋川版のように師弟の契約を結ぶという明確な記述はないが、実際に巻物が伝授されていることで御曹子が大王の弟子として伝授をうけたことが文脈からわかるようになっているのである。

最後に下巻をみていこう。下巻にも大きな異同が存在する。

まず、天女が御曹子に兵法のありかを教える場面である。天女と御曹子の会話を見てみよう。

（いけのや文庫本）

それはこれよりうしとらにあたり七り山のおくに七たんにたんをつき七へにしめをはりいしのくらにこめをきこかねのはこに

おさめつゝたゝよのつねのことならすしやう〳〵けんごのれいちにてことさら女のまいること中〳〵ならさることにてありそのことととてはなり申さす大わうさへ御まいりあるときは三日三夜しやうじんをしてこりをとりよのつねのことにてなしと仰けれは御そうしきこしめしこゝにひとつのたとへありかたりてきかせ申へしせんとちきりておやとなる五百度ちきりてふうふとなるせんとちきりしおやはこの世はかりのなさけなりゆへをいかにと申におやのおんのふかきことしゆみ山を五つほりくづしへいちになしたるよりも父のをんはふかきといふはゝのをんはだいかいをわづかのかいにてかへほし候事はありとも母のをんはなをふかくわうしやうのそうとなり候とをとにはきけともめにはみす五百とちきりしふうふは二世まてちきるとうけたまはる

（渋川版）

それは是よりうしとらの方より七里おくにだんをつきしめをはりいしのくらにこめをき金のはこにおさめつゝたゞよのつねのことならずことさら女のまいる事中〳〵ならざる所なりその事ばかりはおもひもよらぬ事とぞ仰けるよしつねきこしめしこゝにたとへの候ぞや父の恩のたかきことしゆみせんよりもなをたかし母のをんのふかき事は大海よりもなをふかしとは申せ共おやは一世のむすび也ふしぎなりともふうふは二世のちぎりぞかし

渋川版にはいけのや文庫本の傍線部と破線部の内容が存在しない。御曹子が親の恩と夫婦の契りについて語る波線部では、いけのや文庫本は父の恩と母の恩を分けてそれぞれ詳細に説明するが、渋川版は父と母の恩を単に山と海に分けて例示するのみとなっている。

最後に、大日の兵法を御曹子に渡した天女が大王に八つ裂きにされる場面をみてみよう。

（いけのや文庫本）

まことにもつましきものは女子にてありくはんきよにだまされ大事の兵法をとりてやり内裏に火のあめふらすることひとへにこれてんによかしわさなれはたすけてせんなしとてはなのやうなるてんによを八つさきにしてそすてたりけるいたはしやてんによあしたの露ときえたまふむさんなるしたいかな

（渋川版）

天女がしわさなればたすけをきてせんなしとて花のやうなる天女を八つにさきてぞすてたりける

傍線部をみると、いけのや文庫本では天女の罪が改めて記述され、「いたはしやてんによ」以下傍線部のような、天女に同情する言葉が添えられているが、それらの記述は渋川版にはみられない。

いけのや文庫本と渋川版のあいだの大きな異同を俯瞰してみると、

ここまでに述べたような複数の場面で、いけのや文庫本に存在する内容が渋川版では記述されていないことがわかる。しかし、そうした渋川版で記述されていない表現のほとんどは、古梓堂本・九大本の両方もしくはどちらか一方には存在している。こうした点を勘案すると、いけのや文庫本は渋川版とは距離があり、古梓堂本・九大本に近い本文をもっていることが判明する。

次章では、いけのや文庫本が古梓堂本と九大本のどちらに近い本文を持つのかを探っていこう。

二　古梓堂本・九大本との距離

前章では、いけのや文庫本が渋川版よりも古梓堂本や九大本に近い本文を持っていることを確認した。本章では、いけのや文庫本が古梓堂本と九大本のどちらに近い本文を持つのかを探り、いけのや文庫本の諸本間における位置を考察する。以下、いけのや文庫本の本文の傾向を、上・中・下巻にわけて論じていくこととしたい。

二-一　上巻について

結論から述べれば、いけのや文庫本の上巻は、九大本より古梓堂本に近い傾向がある。三本を対照してみると、九大本には独自異文が多く、九大本といけのや文庫本の間には物語展開に影響する異同が目立つのである。いくつか例を見てみよう。

上巻で、九大本に独自異文が見られる典型的な箇所としては、御曹子が蝦夷が島に着いて鬼に食われそうになった場面をあげることができる。

（いけのや文庫本）
いたはしや御さうしはすてに御いのちあやうかりける有様也あさましやかゝるうきめにあふ事も前世のいんぐはめくりきてかゝることの心ほそくおはせしかされ共心を取なをし鬼共に仰られけるやうはすこしのいとまをたひ給へ竹をならしてきかせ申さんと有けれは

（古梓堂本）
いたはしや御さうしは御いのちあやうくみえさせ給ひしかあさましやかゝるうきめにあふ事もせんせのいんくわめくりきてうきめにあふ事よと心ほそくおはせしかされとも心をとりなをし鬼ともにおほせられけるはすこしのいとまをたひ給へ竹をならしてきかせ申さんと有けれは

（九大本）
ちつとも御さうしおとろきたまはすれいのふえをならしきかせはやとおほしめしいかにしま人きゝたまへとても命はのかれさむらはす残りすこしのいとまたまはれおもしろき竹をならしきかせ申さんとありけれはおに共このよしきくよりもなに事やら

んおもしろき事ならはすこしのひまをとらすへしいそきならせ
と申ける

いけのや文庫本と古梓堂本との異同は漢字のあてかたや文末表現に小さな差異が見られる程度である。しかし、九大本では、鬼に対する御曹子の反応などが全く異なっている（傍線部）。いけのや文庫本と古梓堂本の御曹子は、鬼に出会うと命の危機を感じて心細く思うものの、気を取り直して笛を吹こうとしている。しかし、九大本の御曹子は鬼を見ても全く驚かずに笛を吹くことを鬼に提案している。また、その提案に対して鬼が許可を出している展開（波線部）も、九大本にしか描かれていない。

この他、九大本の独自異文としては次のような例がある。引用中の傍線部が九大本の独自異文である。

（いけのや文庫本）
をとにきこえし日かすなれとも
（九大本）
ゑそかしまへの道の日かすとをくおほしめしけれともとてもお
もひ立斗なれは一時もいそかんとてそれよりもやう〳〵日かす

（いけのや文庫本）
おかまはやとおほしめしけれはあんのことく
（九大本）
おかまはやとおほしめしその夜はそこにそあかし給ふあんのこ
とく

一つ目の例は、御曹子が秀衡のもとを出立するにあたって、蝦夷ヶ島への遠さを思っている場面である。九大本は遠い蝦夷ヶ島へ急ごうという御曹子の焦りを独自に表現している（傍線部）。二つ目の例は、御曹子が小さ子島に現れるという菩薩を拝んでみたいと思っている場面である。九大本は、夜を明かすという時間の経過を表現している（傍線部）。これらの例のように、九大本は独自異文が多く、いけのや文庫本とは差が大きいのである。

では、いけのや文庫本と古梓堂本はどの程度近似しているのだろうか。両本の関係を示す箇所として、以下の二例が注目される。一つ目は、行く島々の名を列挙する箇所（いけのや文庫本上巻・詞書三）である。各諸本がどのような順番で島名をあげているか、一覧表の形で比較してみよう。丸数字は各諸本において島名が登場する順番を示し、いけのや文庫本に対応する島名は同じ列にそろえて示しておいた。

いけのや文庫本	古梓堂本	九大本
	①こんろかしま	①こんろかしま
①ゑそかしま		
②大てしま	②大てしま	②大てしま
③はらねこしま		③はらねこしま
	③ねうこのしま	
	④いぬ人島	④犬人しま
④まつしま	⑤まつ島	⑤まつしま
⑤うし人しま	⑥うし人しま	⑥うし人しま
⑥をかのしま	⑦をかの島	⑦をかしま
⑦とら島	⑧とらしま	⑧とらしま
⑧まつまい島	⑨まつまい島	⑨まつまい島
⑨かふどしま	⑩かふとしま	⑮かふとしま
⑩ゆみしま	⑪ゆみ島	⑯ゆみしま
⑪たけ島	⑫たけ島	
⑫もろかしま	⑬もろかしま	⑬もろのしま
⑬いわう島	⑭いはう島	⑭いわうかしま
⑭きかいか島	⑮きかいかしま	⑩きかいしま
⑮けんかいか島	⑯けんかいしま	⑪けんかいのしま
⑯ひるか島	⑰ひるかしま	⑫ひるかこしま

いけのや文庫本と古梓堂本は島名を①から⑰まで同じ順番に並べているが、九大本では順番が異なっていることが分かる。

二つ目の例は、御曹子が女御島に着いた際に、島人が島の守りにするために御曹子を斬ろうとする場面である。

（いけのや文庫本）

まほりかたなをぬきてもちてよろこひかゝりける

（古梓堂本）

まほりかたなをぬきもちてよろこひかゝりける

（九大本）

かたなのつかをにきりひしめきあえり

三伝本のうち、いけのや文庫本と古梓堂本の本文のみが一致する。この箇所はいけのや文庫本と古梓堂本が近い箇所である。

これらの例のように、いけのや文庫本の本文は九大本よりも古梓堂本に近い傾向を強く示している。ただし、いけのや文庫本には古梓堂本とは離れる表現も見受けられる。その一つは、御曹子が女御島へ行った場面にある。御曹子は、女だけの島で子どもがどのように生まれるのかと尋ねると、島人の女は次のように回答する。

（いけのや文庫本）

これよりみなみにあたりてなんしうといふくにありそのかたよ

り吹くる風をはなんふうと申みなみのなんとほしのなんとをとりあつめふきくる風をふくみてさいあひとなる也

（古梓堂本）

是よりみなみにあたりなんしうといふ国あり其方よりふきくる風を南風と申みなみへむきふくめけれはさいあひと成なり

（九大本）

これより南にあたつてなんしうといふ国ありそのかたよりふきくる風をは南風と申みなとのなんとほんしのなんとをとりあつめふきくる風をふくみてさいあいとなる也

いけのや文庫本の島人は、「にようこの島」の南にある「なんしう」という国から吹く南風をふくむと子が生まれると答えており、その南風とは「なんと」を取り集めたものだと説明をしている（傍線部）。これは九大本と共通する記述であるが、古梓堂本の該当箇所には「なんと」への言及がない（破線部）。

御曹子が蝦夷が島に着いて出会った島人の様子にも注目しておこう。

（いけのや文庫本）

としのほと四十はかりをはしめとし二三十人いてたりしか

（九大本）

年のほと四十はかりをはしめとして四五十人出たりしか

（古梓堂本）

としの程四十はかりをはしめとしているひいきやうなる鬼のやうなる者とも二三十人出来

前章で、この後の展開において、渋川版以外では島人が鬼に変化することに触れた。すなわち、いけのや文庫本と九大本では、御曹子は人間の姿をした島人に出会ったことになっているのだが、それに対して、古梓堂本は「いるひいきやうなる鬼」に出会ったと書かれており、この表現は他二本にはみえないものである。つまり、古梓堂本では鬼であった島人が更に恐ろしい鬼へと変化するという、独自の展開を持っていることが分かる。

この他にいけのや文庫本と古梓堂本が異なっている例としては、いけのや文庫本と九大本に「きのほう」（上巻・詞書一）とあるものが、古梓堂本では「いのり法」とあったり、裸島の島人に与える布の描写が、いけのや文庫本は「こんちの上ほん七十たん」（上巻・詞書四）とし、これは九大本に共通するが、古梓堂本が「色〳〵のきぬ七百疋はかり」と異なっていたりする例がある。ただし、いずれもこうした細かな異同にとどまる。

以上のような様相を踏まえると、いけのや文庫本上巻の本文は、全体として九大本よりも古梓堂本に近い傾向が強いと言える。一部に、古梓堂本からは離れて九大本に近い表現もあるが、文意や設定の違いをもたらす異同は多くない。

二-二　中巻について

次に、いけのや文庫本中巻の本文について、古梓堂本・九大本との距離について論じていこう。

あらかじめいえば、中巻の本文は、上巻と同じく九大本より古梓堂本に近い。九大本には他二本にはない異文が多く、また、大幅に省略されている場面もあり、それらによって九大本といけのや文庫本の間には物語展開に影響する異同が目立つ。一方、古梓堂本は、いけのや文庫本との異同が全くないわけではないが、その異同が物語展開に与える影響は少ない。

中巻において、九大本に異文が見られる箇所の一つが、鬼たちが御曹子の笛を聞いた場面にある。古梓堂本といけのや文庫本は本文は全く同文であるため、ここではいけのや文庫本と九大本を対照しておこう。

（いけのや文庫本）
おにともこれをきくよりも竹をならすかおもしろきに

（九大本）
おにともこれをきゝかんるいをなかしさてもおもしろき事ともなり

九大本では、傍線部の異文によって、鬼たちが感涙を流すことになっている。

二つ目の例は、喜見城に到着した御曹子が鬼たちに連れて行かれる場面である。

（いけのや文庫本）
御さうしをみつけてよこ手をはたとうちあらうれしやけふのゑしきかきたりたるそといふまゝに中にとりこめてくはんとこそしたりけれ

（九大本）
御さうしはみたまひてよこ手をちやうとうちてさもおひたゝしきやうすかなとてみとれなかめておはしますにはこの鬼ともこれをみてさてもうれしやけふのゑしきかきたりたるとて二三十人はしりきたりまん中にとりこめくはんくとせめにけり

九大本では、傍線部の異文によって、鬼たちを見ている御曹子の様子が描かれている。また、鬼たちの人数が具体的に「二三十人」と表記されてもいる。なお、この場面の古梓堂本といけのや文庫本の異同は、古梓堂本で「中にとりこめふくせんとこそしたりけり」とある一文に異同がみられるだけであるため、ここでは引用を省略した。

三つ目の例は、鬼の大王が御曹子の笛の演奏を聞いて喜ぶ場面の

大王の発言である。

（いけのや文庫本）

くはんきよはよきにこれまでわたりたる三百年かそのさきにあしはらこくよりわたりたちまち道にていのちをうしなひけるとかやさても御身はなんなふこれまでわたり給ふことこそありかたけれのそみありてきたり給ふかかくさす申せ

いけのや文庫本で御曹子の偉大さを強調している傍線部の表現が、九大本には存在しない。ちなみに、古梓堂本といけのや文庫本の異同は、「三百年」が「二百年」になっている点と、「御身は」が省略されている点の二点のみである。

以上のように、九大本は、古梓堂本と比べると、いけのや文庫本との差が大きいのである。

次に、いけのや文庫本と古梓堂本との距離を確認していきたい。中巻は上巻と同様、古梓堂本はいけのや文庫本とほぼ同じ表現がとられている。ここでは、いけのや文庫本と古梓堂本の異同の性質を確認することで、いけのや文庫本との距離を測っていきたい。

いけのや文庫本と古梓堂本の異同が見られる例として、喜見城の都の内裏の描写がある。

（いけのや文庫本）

六十ちやうのくろかねのさくをふりおなしくとひらをたてさせ給ひ二十ちやうにこかねのついぢをつかせおなしくしやく木おなじく戸ひらをたてさせたり

（古梓堂本）

六十ちやうのくろかねのさくをふりおなしくとひらをたてさせたり

古梓堂本には傍線部が存在せず、内裏の描写は簡略である。ただし、傍線部の前後にかかって「おなしくとひらをたてさせ」という表現が重複していることを勘案すると、古梓堂本では目移りによる脱文が生じた可能性がある。

二つ目の例は、大王が御曹子に兵法について説明する場面である。

（いけのや文庫本）

その川にてあしたにも三百三十三度ひるも三百三十三と六百六十六とのこりをとり

（古梓堂本）

その川にて三百三十三度のこりをとり

（九大本）

その川にてあすよりも三百三十三度夜も三百三十三とあはせて六百六十六とのこりをかき

（渋川版）

その川にてあさ三百三十三と夕に三百三十どこりをとり

この場面は、古梓堂本だけでなく他本にも異同が見られるが、一日に二度垢離をとるという設定をもたない古梓堂本が最も大きく異なっている。

三つ目の例は、鬼たちが喜見城の都までの道中にある川について説明する箇所である。

（いけのや文庫本）
水のはやき事みつばのそやをいるかことし
（古梓堂本）
みつのはやをいるよりはやき川也

古梓堂本はこのままでは意味をとりにくく、この場面でも、古梓堂本には転写時の誤脱と混乱が生じている可能性がある。

中巻について、いけのや文庫本と古梓堂本の目立った異同はこの三箇所だけであり、そのうちの二例は意図的な改変ではない可能性も認められた。なお、これら三例の他の異同としては、漢字表記や文末表現に小さな差異が見られる程度である。

以上を踏まえると、いけのや文庫本は古梓堂本と全く同じというわけではないが、両本の間に確認できる異同は物語の設定や展開に与える影響は小さいものである。いけのや文庫本中巻の本文は、上巻と同様、九大本よりは古梓堂本に近いということができよう。

三　下巻について

前章までの検討により、上巻・中巻の本文が古梓堂本に近いことが明らかになった。続いて下巻の検討に移るが、下巻には九曜文庫本の本文も残存しているため、[6] 本章では九曜文庫本も含めて検討していく。なお、いけのや文庫本が九曜文庫本と対応する箇所は、下巻の詞書二以降である。

三・一　九曜文庫本との距離

いけのや文庫本下巻については、石川透氏が、「この絵巻は、九曜文庫本として、『奈良絵本絵巻集』一一（早稲田大学出版部、一九八八年九月）に三巻中一巻のみの零本として紹介された絵巻と酷似しており、おそらくほぼ同時に制作されたことが明らかである」[7] と述べ、いけのや文庫本に近い伝本として九曜文庫本を挙げている。その後、齋藤真麻理氏も、「諸本系統では第一系統に属し、九曜文庫の絵巻と近く、同一工房で制作された可能性が高い」とし、いけのや文庫本の本文は第一系統とされる古梓堂本に近く、絵も含めると九曜文庫本に非常に近いと指摘している。[8]

このように、これまでの研究においては、いけのや文庫本に最も

近い存在として九曜文庫本が挙げられてきた。しかし、あらかじめ述べれば、いけのや文庫本と九曜文庫本の本文間には、看過できない多くの異同が存在する。以下、その点を指摘していく。

その最たる例として、まず、鬼たちが御曹子を追いかけていく場面を見てみよう。以下、三本の該当本文を、構成要素ごとに細分化した対照表の形で示しておく。

いけのや文庫本	九曜文庫本	古梓堂本
あんにもたかはす さらはおつかけよとありしかはとかくのさたにをよはす あはうらせつのおにともか 千人はかりおいであひて われさきへと いそきつゝてんくはのばうに ぶすの矢をはめて うきくつといふ馬などに のりおつかくる	**されはこそとよとかくのさたにをよはす** **まつくはんきよかおち行さきへをつかけつれて** **きたれとて** **あはうらせつのおにともに仰つけられけれは** てんてにほこてつちやうをひつさけ 千人はかり われさきへと うきくつはかせたる馬に のりつれおつかけゝる	**されはこそとよとかくのさたにをよはす** **まつくはんきよかおち行さきへをつかけつれて** **来れとて** **あはうらせつのおにともに仰つけられけれは** てんてにほこてつちやうをひつさけ 千人はかり われさきへと うきくつはかせたる馬に のりつれおつかけける

まず、対照表に太字で示した箇所を確認すると、いけのや文庫本では、他二本と異なる表現がなされていることがわかる。さらに、細かな文脈にも留意してみれば、その差異は展開にまで及んでいる。その例として、波線部「とかくのさたにをよはす」という表現に注目したい。いけのや文庫本では、鬼たちの行動として機能している表現であるが、九曜文庫本では、大王の言葉として機能しているのである。いけのや文庫本では、この表現の後に「あはうらせつのおにともが千人はかりおいであひて」と続くことで、鬼たちが御曹子を追いかけるという一連の動きへと繋がっていく。その一方で、九

曜文庫本では、「あはうらせつのおにともに仰つけられけれは」と続くため、この時点では、いけのや文庫本とは異なり、鬼たちは大王から命令を受けただけに留まっており、両本の展開には違いが生じている箇所となっている。

次に、鬼たちの恰好に注目したい。いけのや文庫本では、「てんくはのばうにぶすの矢をはめて」「うきくつといふ馬など」に乗るとある。これが九曜文庫本になると、「てんてにほこてつちやうをひつさけ」「うきくつはかせたる馬」に乗るとしているのである。

以上のように、いけのや文庫本と九曜文庫本との間には、文字や言い回しといった細かな違いだけでなく、内容や展開に踏み込んだ差異が存在する。これらをはじめとして、多くの異同がみられる両本の距離は、必ずしも近いとは言いがたい。

さて、ここで改めて、先の対照表を見てみると、九曜文庫本は、いけのや文庫本よりもむしろ古梓堂本と非常に近いことが確認できる。じつは、こうした傾向は、九曜文庫本と古梓堂本の大半の場面に当てはまり、両本のあいだに大きな異同はほとんど見当たらないのである。そこで、両本の距離が最も離れていると考えられる一例を紹介しておこう。次に引用するのは、御曹子のために天女が兵法を持ち出す場面である。

（九曜文庫本）

石のひつのなかに金の箱に入たるをしめなははらりときりほときみ給へは石のとひらさうへはつとひらきたる

（古梓堂本）

石のひつのなかに金のはこに入たるをしめなははらりときりほとき石の戸ひらひらきみ給へは石の戸ひらさうへはつとひらけける

右の引用を踏まえて、天女が兵法を取り出す手順を確認すると、九曜文庫本では、注連縄を切り解いて見ると石の扉が開くという流れになっている。一方、古梓堂本では、傍線部があることで、石の扉が開くということに関して、やや回りくどい言い回しになっているのである。先に述べたように、両本間の異同は、この例の他には九曜文庫本で「御覧」とあるのが古梓堂本では「御らん」とあるというような表記の差が見られる程度である。両本は全くの同文ではないものの、非常に近い関係にあると言えよう。

これまで確認してきたことを簡潔にまとめると、以下の二点となる。ひとつは、九曜文庫本の本文は古梓堂本と極めて近いものであること。もうひとつは、いけのや文庫本の本文は、九曜文庫本とは距離があるということである。いけのや文庫本について、従来は九曜文庫本との近さが指摘されてきたが、本文系統の問題としてはその点は改めなければなるまい。

三・二　九大本との距離

次に、いけのや文庫本の下巻の本文は、九大本とどういった距離にあるのか、検討していこう。

検討に際して、二つの記事に注目したい。ひとつ目は、御曹子が兵法獲得の為に天女を説得する場面である。この場面で、御曹子は親の恩の深さについて説いている。

いけのや文庫本	九大本	九曜文庫本
おやのおんのふかきこと しゆみ山を五つほりくづし へいちになしたるよりも 父のをんはふかきといふ はゝのをんはだいかいを わづかのかいにてかへほし候事はありとも 母のをんはなをふかく わうしやうのそうとなり候と をとにはきけともめにはみす	おやのおんのふかき事 しゆみせんを五つほりくつし へいちはなしたるよりも ちゝのをんはふかきといふ はゝのをんは大海を わつかのかいにてかへなしたる事はありとも はゝのみは猶ふかし はうしやうのそうとなる候と をとにはきけともめにはみす	父母のおんのふかき事は しゆみせんさうかいにもたとへかたし （以下、該当箇所なし） （古梓堂本については、九曜文庫本と同文のため、割愛した）

対照表にみえるように、九曜文庫本では、恩の深さについて、「さうかいにもたとへかたし」と簡潔に説明されている。しかし、いけのや文庫本と九大本では、父と母の恩をそれぞれ分けて詳しく説明している。この場面は、いけのや文庫本と九曜文庫本との違いが明らかな箇所である。一方で、いけのや文庫本と九大本との間には、こうした内容上の大きな差が出るような違いは見られない（九大本の傍線部がいけのや文庫本と異なる箇所）。ここから、いけのや文庫本と九大本との距離の近さが確認できよう。

この例をはじめとして、いけのや文庫本と九大本が近い距離にあるという傾向は、随所に表れている。例えば、共に日本へ逃げようという御曹子からの誘いを天女が断る場面もその典型例である。

いけのや文庫本	九大本	九曜文庫本
てんによはこれをきゝ給ひし あしはらこくへまいること ゆめ〳〵ならさることにて候 名残をしみの物かたりに	天女はこれを聞たまひ あしはらこくへまいること ゆめ〳〵ならさることにて候 名こりをしみの物かたりに	天女きこしめし いかなるうきめにあふとても今生にては あしはらこくへまいること ゆめ〳〵ならす事なり 御さうし天女をともなひかへりたきと色〳〵あん したかひにかなしみ給へともかなはさるしさいな れはわかやをおくり出給ひて なこりおしみの物かたりに

記事対照表の九曜文庫本に注目したい。この場面は、いけのや文庫本と九曜文庫本との間には大きな異同があることは明らかである。一方、いけのや文庫本と九大本の間には表記の違いがあるのみである。

以上の例から典型的に読みとれるように、いけのや文庫本の本文は九大本と非常に近いことが分かる。

では、いけのや文庫本と九大本の近さはどの程度のものなのだろうか。まず、早く逃げるようにと天女が御曹子に警告する場面に注目したい。

（いけのや文庫本）
大事のひやうほうにてありしらかみになるうへはこのたいりにかならすしるしあるへし大事のなきそのさきにはや〳〵かへらせ給へとそおほせける

（九大本）
大事の兵法にてありしらかみなるうへは①此たいりにはかなふましいそき②あしはらこくへかへらせ給ふへしはや〳〵とそおほせける

いけのや文庫本では、御曹子が書き写したことで兵法が白紙になってしまい、このことは必ず内裏に兆しが出てしまうだろうとある。

しかし、九大本の傍線部①を見ると、いけのや文庫本とは異同が見られる上に、内裏にいることはできないだろうと、異なる文脈を生み出している。また、いけのや文庫本では、「はや〳〵かへらせ給へ」とただ帰国を促しているのに対して、九大本では傍線部②にあるように、「あしはらこくへ」と具体的な行先まで記している。

いけのや文庫本と九大本の間は、このような異同箇所がしばしば見られる。次の場面もそのひとつである。

（いけのや文庫本）
大りに大事いてきぬそのさきにとく〳〵かへらせ給へこゝろなのこらせ給ひそみつからはてぬるともこれもぜんせのさたまりことなりぢやうごふすてにきはまりたり

（九大本）
大りに大事いてきぬそのさきにとく〳〵かへらせ給へとて涙をなかしのたまひけることにはかれの事なれはたかひに残りおほく思召

ここに挙げた例は、御曹子と天女の別れの場面である。九大本は、いけのや文庫本にない傍線部を持っている。さらに、いけのや文庫本ではここに挙げた文は全て天女の言葉となっているが、九大本では傍線部は全て地の文となっている。いけのや文庫本に比べて、九大本では天女の言葉が大幅に短くなっているのである。本場面からも、九大本との差が明らかである。

以上のことから、本章では大きく二つのことが明らかになった。まず、従来いけのや文庫本に近いと考えられていた九曜文庫本は、じつはいけのや文庫本との間にかなりの異同が見られ、本文としてはいけのや文庫本よりも古梓堂本に近いことが確認できた。ふたつめは、いけのや文庫本は九大本と近い本文をもっていることである。ただし、両本の間には異同も見られ、全くの同文ではないことには注意が必要である。いけのや文庫本下巻の本文は、九曜文庫本や古梓堂本ではなく、九大本に最も近いという傾向をもつと共に、他の伝本には見られない独自の文を含んでもいる伝本と言える。

おわりに

以上、いけのや文庫本の本文検討を行ってきた。ここで改めてこれまでの論旨を確認したい。まず、一章では、いけのや文庫本は渋川版とは距離があり、古梓堂本・九大本に近い伝本であることを明らかにした。これを踏まえて、二章では、古梓堂本・九大本間におけるいけのや文庫本の位置を考察した。すると、上巻・中巻ともに九大本よりも古梓堂本に近い傾向が強く見られる結果となった。続く三章では、二章と同様の観点から下巻本文の検討を行ったが、上巻・中巻とは異なる傾向が認められた。下巻については、比較対象として九曜文庫本を加え、三章前半では九曜文庫本との比較を行っ

た。すると、九曜文庫本は古梓堂本と最も近い傾向があり、いけのや文庫本との間には多くの異同が存在することが確認できた。そして、三章後半での九大本との関係についての検討を経た結果、いけのや文庫本は、九大本と最も近い伝本であることが判明した。ただし、いけのや文庫本のみに見られる表現もあり、両本は全くの同文ではないことには注意する必要がある。

いけのや文庫本を視野に入れることが可能となり、既知の伝本それぞれの本文の傾向がいっそう明らかとなった。これによって、伝本の関係把握が一歩前進したと言えよう。本稿では触れられなかった他伝本との関係の検討や、挿絵についての考察という次なる課題に取り組み、分析を深めていくことで、『御曹子島渡り』研究の進展が大いに期待できよう。『御曹子島渡り』の世界は、まだまだ広がる可能性を秘めている。

注

（1）齋藤真麻理「渡海の絵巻―いけのや文庫蔵『御曹子島渡り』」（『国文学研究資料館紀要　文学研究篇』四十四、二〇一八・三）。以下、本稿における齋藤論文への言及はすべてこの論文にあたる。

（2）今橋萌・河合恵・小関あかり・齊藤探花・佐々木萌・笹村泉・鈴木彰「池谷家蔵『島わたり』絵巻翻刻」（『立教大学日本文学』一一九、二〇一八・三）

（3）国文学研究資料館の日本古典籍総合目録データベース、新日本古典籍総合データベースから閲覧可能。

（4）近年、その存在が知られるようになった伝本としては、齋藤真麻理氏が取りあげた兵庫県立歴史博物館蔵本（横型奈良絵本。一冊。後半欠）や、『思文閣古書資料目録』第二五四号（二〇一七年七月）に掲載された絵巻（三巻三軸）がある。

（5）石川透「〈研究ノート〉『御曹子島渡』の伝本について」（『文学・語学』二〇八　二〇一四・三）。

（6）いけのや文庫本の上巻・中巻にあたる箇所は九曜文庫本では欠落している。

（7）注（5）石川論文。

（8）注（1）齋藤論文。

【付記】

本稿は、いけのや文庫本『島わたり』の検討をめざした学生研究会（島渡り研究会）による活動の成果である。同研究会は、注（2）掲載の成果を発表したあと、卒業などの事情でメンバーに入れ替わりがあったが、本稿は一連の研究会活動の成果が踏まえて、現在の研究会メンバーである各執筆者がまとめたものである。なお、執筆分担は、下記の通りである。齊藤（はじめに・三・おわりに）、古山（一）、河合（二-一）、田端（二-二）、鈴木（全体の点検）。

（さいとうたか　本学大学院博士課程前期課程在学生）
（かわいめぐみ　本学大学院博士課程前期課程在学生）
（こやまりえ　本学文学部文学科日本文学専修在学生）
（たばたみさ　本学文学部文学科日本文学専修在学生）
（すずきあきら　本学文学部教授）